

# 「日本の楽器が友好を奏でる」

コートジボワール大使

岡村善文



おかむら よしふみ

1981年東京大学卒業、外務省入省。国連コンボ暫定統治機構(UNMIK)首席政務官、軍備管理軍縮課長、在仏大使館公使、在ウィーン代表部公使を経て、2008年9月より現職。ブログ「コートジボワール日誌」で大使の日常を綴る。

世界各国にある大使館は133、総領事館は64(2010年8月現在)、外国と外交を行う上で重要な拠点となっています。この連載では、外交の最前線＝フロントラインで活動する外交官に、現地での日々を語っていただきます。

勤務環境が厳しいアフリカには、体力のある若手を送るべきだ。「若手大使」と銘打たれて、ガーナの片上大使、アンゴラの越川大使とともに、私は西アフリカのコートジボワールに、2008年の秋に赴任した。

コートジボワールは、かつては西アフリカの中核国で、コーヒーやカカオなどの商品作物の生産を軸に、豊かな経済を築いてきた。しかし2002年に北部の反乱が起こり、国

は南北に分断された。日本大使館は一時閉鎖、前任の大使は2006年に退避していた。こうした中で、日本とコートジボワールの友好関係を再び取り戻すのが、私の仕事である。といっても、何から手を付けていい

のだろうか。内戦突入後、各国とも経済協力は中絶し、欧米や日本の企業の多くは撤退した。国民和解の合意により、ひとまずの平和が訪れているとはいえ、この国が大統領選挙

を行うまでは、経済協力、貿易の再開、政府要人の往来などお預けである。日本の存在感をゼロから再建するのは容易ではないと思えた。

ある日の夜、ドイツ大使が公邸で開いた音楽会に、私も招かれた。クラシック音楽や民族音楽の演奏家が次々に登場して演奏する。紛争にかかわらず、音楽を愛する人々は、たゆまず修練を重ねてきたのだ。感慨にふけていたら、声をかけられた。



上・日本から贈られた楽器で演奏する音楽院の学生たち。下・現地の人々と交流する大使

「日本大使とお見受けしますが」

はい、そうですが。その女性は、自分は国立音楽院の教授だと名乗り、そして、私に言った。

「日本大使、私たちは心から感謝を申し上げます」

さて私には身に覚えがない。そう応えると、女性教授は、私を、さきほど楽団が演奏をしていた場所に案内した。そこには、楽器を収めた黒いケースが、一カ所にまとめて置いてあった。見ると、一つ一つの楽器に、

小さな日の丸が付いていた。

「これらの楽器は全部、過去（1992年）に日本が供与してくれたものなのです。音楽院の学生たちは、この楽器のおかげで、音楽を続けることができました」

取り出されたサククスやトランペットは、新品のように磨き上げられていた。文化無償で日本から贈られた楽器は、音楽院の先輩から後輩へ、大切に伝えられてきていた。

政治や社会の混乱があると、およそ芸術活動は真つ先に犠牲になる。しかし、音楽院の学生たちは、再び芸術が生き返る日を待ちながら、楽器と技術を磨いてきたのだ。

この音楽院への協力以外にも、私はあちこちで、日本が過去に行った協力について感謝された。コートジボワールとの関係は、決してゼロに

はなっていないかった。過去何十年と積み上げられた経済協力の実績は、少々の困難な時期を経ても、しっかりと両国友好の基礎となっていた。

楽器の話に戻る。その年の年末、公邸で開催した天皇誕生日の祝賀会に、音楽院の学生たちに来てもらった。もちろん、日本から贈られた楽器を携えて。大勢のお客さんを前に、学生たちの楽隊は、コートジボワール国歌「アビジャネーズ」と日本の「君が代」を、高らかに吹奏した。

「ここに集う音楽院の学生さんたちは、日本とコートジボワールの協力関係を象徴しています。日本が行った協力を、コートジボワールの人々が大切に受け取り、年月を経て、それを豊かに育ててくれる。そういう関係こそ、本当の友好の関係です」  
私は、祝辞をそう締めくくった。